

大正中津川の「関札」のこと―『はこばの四季』追録―

山崎 眞弓

大正中津川にはいくつの関札があったのか

2014年に刊行した拙著『はこばの四季』（南の風社）には四万十町大正中津川在住の郷土史研究家・徳弘誠男さんの貴重な昔語りを掲載させていただきました。その中に「関札」があります。集落のあちこちにひっそりと掛けられている「関札」を集落マップの中にも落とし込みましたが、当時実際に確認したのは3所だけ。ずっと気になっていました。



関札（2020）

2020年1月にあらためて再確認することができました。なんと8カ所ありました。場所は地図1と表1のとおりです。今は本村集落と森ケ内集落合わせて大正中津川と呼ばれていますが、本村と森ケ内の境にも「関札」があり、か

つては別の集落であったことの名残があります。「関札」がいつごろからの風習なのか興味深いところです。

そして今となっては確かめることは難しい成川集落を考慮すると大正中津川には少なくとも10カ所の関札があったのではないかと想像します。

「関札」は毎年、その年の当家が担当となり春祈祷を受けたのちにもとのところに掛けておくことになっています。

「関札を探せ！」―ゲーム世代の民俗学ワークショップ―

そこに住む人にとっての「集落」

あらためて大正中津川の「関札」の位置を確認するに至ったきっかけは高知大学地域協働学部1年生による大正中津川地域調査（2020年1月13日実施）です。この地域調査のねらいは「住民がわが集落として認識している空間」を自分たちも体感しようというものです。

地域協働学部の学生は座学として「地域というもの」について様々な視点からの講義を受けます。例えば地域の中で小学校がどのような存在であったのか、開発あるいは地域の産業構造の変化が地域にどのような変容をもたらしてきたか、ジェンダーを含む家族のありようなどなど。そして1年生からさっそく高知県内の各地域で実習（地域活動への参加など）に入ります。

講義に演習に忙しい学生たちを見ていてふと学生たちは地域（集落）をどうとらえているのだろうか、と思いました。住民の方々にとって「わが集落」とはどういうもので、その「わが集落」に外から人が入ってくるのをどういう気持ちで受け止めているのか。そういうことを学生たちは想像したことがあるだろうか。

そこで、集落の空間、それも代々引き継がれてきた歴史を持った集落の空間を具体的に感じ取る体験を演習としてやってみたいと思いました。何か具体的に体感できるもの。頭に浮かん

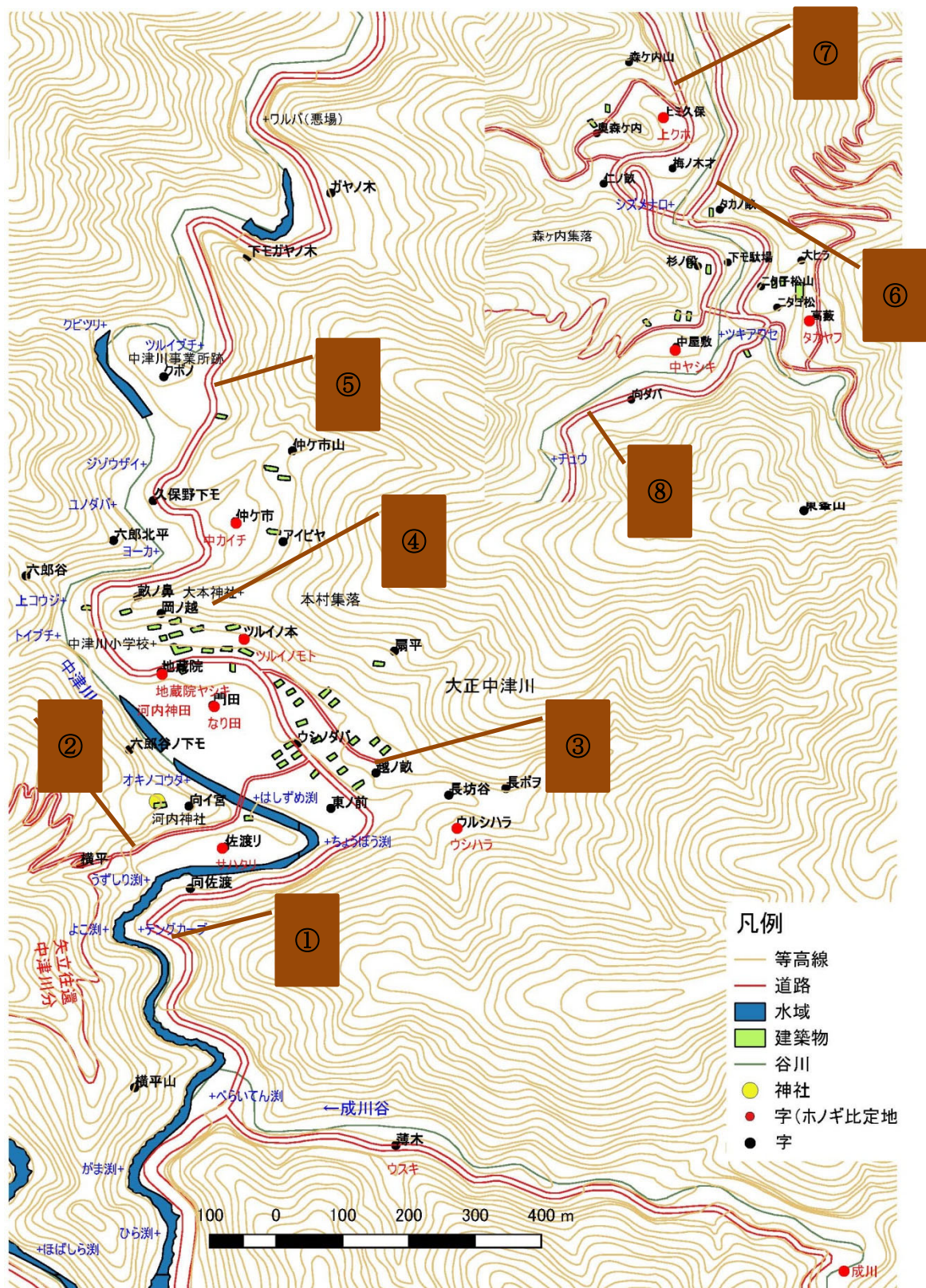


図1 大正中津川の関札位置図

表1 関札の場所（2020年1月13日確認）

地図No	関札の場所	備考	当家（組）
①	てんぐカーブ		本村 2020年現在、本村には4つの組がある。
②	矢立往還街道 分岐		
③	越ノ畝		
④	山の神 近く		
⑤	森ケ内に向かう道の途中	中津川事業所後の対岸	
⑥	春分峠に向かう往還		森ケ内 全体で1組である。
⑦	松原に向かう往還	もとは奥森ケ内から矢立街道に至る道の上にあった。	
⑧	向ダバと「チュウ」の間		

春祈祷のやり方（2020年1月7日時点）

本村（4組）、森ケ内（1組）の組ごとに持ち回りで「当家（とうや）」が決まりその年の神事にかかわる。この5組の当家からさらに代表を1名決める。

春祈祷は田野々の大夫さんが代表の家に来て祈祷を行う。

○各家の関札の祈祷

組の当家が集めて回り代表の家に持っていく、そこで祈祷を行う。

○往還の関札の祈祷

家の関札祈祷の時に、新たにその年の関札を大夫さんが書き祈祷を行う。家の関札と違って毎年更新する。

○祈祷を受けた関札は、家の関札は当家が各家に戻しに行く。往還の関札も当家が分担して掛けに行く。



各家の関札

だのが「関札」でした。この演習の中でゲーム感覚でやってもらったのが「関札を探せ！」と名付けたワークショップです。

概要を説明しますと、①まず住民の方の案内で1, 2カ所の「関札」を確認。「関札」とはどのようなものかを覚えてもらいます。②それ以降は、一定のエリアを指定して学生たちだけで「関札」を探します。

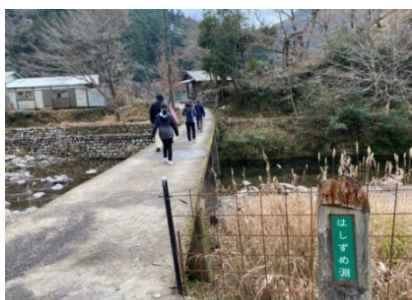
学生たちは中津川の川沿いの道路、矢立街道に至る藪の道、林道を嬉々として走り回り、「関札」を見つけると大きな歓声をあげました。そして、道の先にあった住居跡、小さな祠、落ち葉でふかふかした尾根の道の感触を、驚きをもって報告してくれました。住居跡からは住民が

減少している現実を、祠は信仰のありかであり、尾根の道はかつての往還であったことも話しながら歩きます。

赤線とよばれる「里道」に気づいた女子学生がいました。家と家の間の細い道。山の斜面の畑を通る山道。「今まで実習でいろんな地域に入っていたのですが、こういう道はその家にだけのプライベートな通路だとなんとなく思っていました。これって道路だったのですね！」と目が輝いていました。彼女の「地域を見る視点」はここからきっと変わるでしょう。演習のねらいは「境を意識すること」でしたがそれを越えて集落の生活の血管のような「小道」を見出してくれたのはとても嬉しいことでした。

半日程度のワークショップだけでは「関札」から歴史や民俗学的な関心まで至るのはとても無理です。しかし学生の振り返りレポートからは彼らが「集落という空間」を楽しい思い出とともに体感できたことがうかがえました。

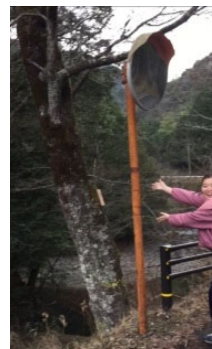
そして、この機会に大正中津川集落の現時点での「関札」の位置を確認できたこともとても有意義でした。



昔の往還を矢立街道に向かって。みんな張り切って歩く。



学生にとっては初めて歩く林道。思わず歌を口ずさ



「関札、ここにありました！」。SNS世代は絵になるポーズ。



山の神の近くの「関札」。家と家の間を通って尾根に至る急な坂道（里道）のわきに掛けられていた。

集落（ムラ）境にまつわる行事のこと

行政区分とムラ（集落の空間）

ちょうどいい機会なのであらためて、「関札（結界札）」についてももう少し詳しく調べてみました。

「関札」は集落の境（ムラ境）に掛けられます。

「ムラの領域はしばしばムラに入ってくる道路上で顕在化するものであり〈中略〉、ムラ境は

ムラと外を結びつける道路の数だけある」¹⁾ ということに、「ムラ境」は道の上にあります。

このように「定住地（集落）のみをムラとして、ムラとムラをつなぐ道の境を意識していた時代」から、やがて「村を一つの行政区画とするようになってから其の田畠山野までを総括して村と称する」（柳田 1910）ようになります。

今や「村境」は地図上に引かれた線であり、そうってから相当な時間が経っているのですが、それでもなお住む人々が感じているムラ（集落の空間）は行政区分とは隔たりがあるように感じます²⁾。「関札を探せ！」もまさにこのムラ（集落の空間）を体験しようというものでした。

道切り行事

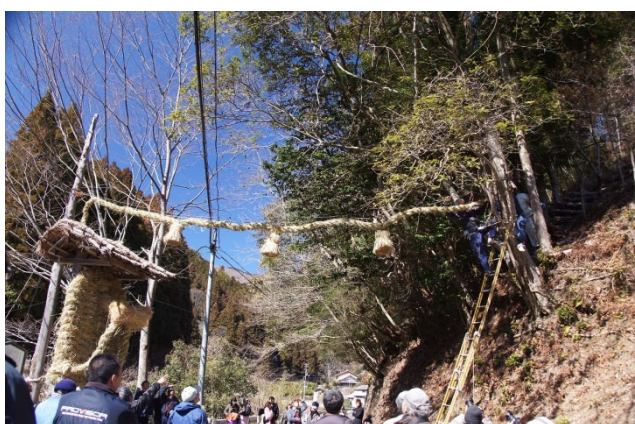
萩原秀三郎氏は「ムラ境」をこの世と異界（あの世、神）の接点として信仰と絡めて論じていますが（萩原 1988）、昔のムラの内と外は、私たちよその者が思うよりずっとはっきりと区別されていたのではないかと思います。「関札」は「結界札」とも呼ばれます。「結界」とは「ムラ境」の向こうは異界、私たちとは相入れぬ者たちの住む場所ということを意味します。

この「ムラ境」では疫病やその他の厄災がムラに入り込むのを防ぐために行われるのが「道切り行事」。祈りを込めた「魔除け」が「関札」や「草鞋」です。

『高知県史 民俗編』にはこのように記されています（高知県編 1978）。

このような境界は集落に近い出入口であり、ムラ境をめぐる各種の民俗がみられる。悪霊の入村を防ぐ道切の注連縄をここに張り虫送りもここを終点とし、伊勢講・金毘羅講などの代参者の送迎、かつての出征兵士の送迎もここで行われた。だからここは聖地だと考えられ、各種の祈幕札が立っているのをよく見かける。正月に行われる春祈禱の時、悪霊の入村を防ぐためコンゴウゾウリという大草履を吊るすのは、このようなムラの入口である。盆月（7月）や彼岸に遠くより訪ね来る者を接待するための茶堂も、このようなムラの入口に建っている。

「ムラ境」はそういう重要な意味を持つ場所です。



津野町宮谷の「堂の口開け祭」

大わらじとムラ境の注連縄（2013）

高知県内各地の道切り行事

「道切りの行事」は大正中津川だけでなく高知県内各地にあります。二つの資料ではこのように記載されていました。

○『高知県の祭り・行事』（高知県教育委員会）

高知県内の 193 地区の祭り・行事を 31 のテーマに分類しています。

「関札」は「五悪霊防御(防ぎ 悪霊送り・神送りを目的とする祭り・行事) : テーマ番号 15」に分類され、これに該当するのは 13 カ所³⁾です。また詳細に見てみると、テーマ 15 に分類されていないものの中にも「関札 (それに代わるもの)」を掛ける行為が含まれている祭り・行事も 3 か所⁴⁾があります。

「関札」の祈祷は多くは春 (1 月) に行われていますが、土佐市波介のように「虫送り」の夏祈祷の場合もあるようです。

○『十和千祭』(飛鳥出版室)

隣接する十和村内のさまざまな祭りの記録の中、冒頭の「村祈祷、春祭りなど」の中に関札 (結界札) の行事を見ることができます。紹介されている「村祈祷・春祭り」14 カ所⁵⁾のうち 4 カ所⁶⁾に関札 (結界札) や藁草履を飾る様子があります。

もちろん、調査時点では無かったとしても、この 4 カ所以外の地域 (組、村) に関札 (結界札) がもともたなかったということではなく、かつては全集落にあったと考えるのが自然ではないかと思います。

グローバリズムの時代と「関札」

「関札」の稿を準備しているまさに今 (2020 年 2 月)、新型コロナウイルスが隣国の中国で発生し見る間に世界中に広がっています。空港や港という「国の境」で「関札」ではなく「検疫」が疫病を食い止めようと頑張っていますが、それも難しい状況になってきました。「隔離」、「拒否」、「禁止」という穏やかならざる言葉があふれ不安を煽ります。

「病気が人を介して伝染する」というのは今風の言い方であって、昔は「疫病」は目には見えない恐ろしいものでした。疫学的な知識もなく予防法も治療薬も無く、集落の人々はさぞ怖かったことでしょう。

科学の時代の私たちですから原因や対策はある程度知っているのですが、今回のように情報不足になると昔の得体のしれないものへの恐怖がよみがえります。今みんなが「広がりませんように、一刻も早く終息しますように」と祈っていると思います。

「関札」の「祈り」は、どんな科学の進んだ時代になってもずっと続いていくのではないかと思います。

「鉄巖坊さま」に見る「往来」

「ムラ境」には「祈り＝関札」とともに「往来」があります。

非常時は「祈り＝遮断＝関札」、平常時は「往来」。往来はムラの持続や発展に影響をしてきたと思います。

徳弘誠男さんが書き留めた中津川民話の記録⁷⁾から「鉄巖坊様の由来」⁸⁾を引用させていただきます。



関札越しに見る鉄巖坊さま（2013）

「鉄巖坊さま」はサワタリ橋を通過して矢立街道に至る往還の「関札」の近くにありますが。道を通して往来する人と集落の人々との関わりが見える昔語りです。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「中津川民話 鉄巖坊様の由来」

中津川の桜の峠行きの道脇に鉄巖坊という小さな祠があります。江戸時代には祈禱を行いながら各地を放浪する修験者がかなり居たようです。

何時の頃かは資料が有りませんが、修験者の一人が茶堂で行き倒れに成りました。地域の者が心配して見に行くと息絶え絶えの中で「俺はもう死ぬるが死んだら済まんが始末をしてくれ、その代わり皮膚病の者を必ず直してやる」そう言い残して息絶えました。男はひどい皮膚病に羅って居たのです。



奉納された旗（2013）

村人は往還の上に生えて居た樫の木の本に葬り、鉄巖坊様と呼んで祀られました。私が記憶している鉄巖坊様は樹齢 200 年直径 1 m20 c m 位の樫の大木に抱かれ、社殿も 2 m 四方で日本瓦葺きの立派なものでいかにも神々しい佇まいでした。

人々の信仰も厚く、遠く窪川・松葉川の人たちが願掛けにきていた事を覚えて居ます、私も少年の頃、漆にかぶれてお願を掛けた事が有ります。お礼に布切れの旗を奉納したようです。いまその古い旗の数を見ればいかに信仰を集めていたか想像できます。

昭和 40 年頃台風で樫の木が倒され社殿も破壊されました。幸い拝殿だけは健在でしたので残木を使って小さな社殿を作り現在に至っています。尚此のとき、被害をうけてかなりの数の古旗が廃棄されたのが残念です。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

行き倒れの人を祀った祠や言い伝えは各地にあります。見知らぬそれも病に倒れた人を昔の集落の人々はどういう気持ちで迎えたのでしょうか。自己中心的な現代の私たちからすると歓迎の気持ちとは遠い感情も浮かびますが、昔の集落では別の感じ方もあったのかもしれませんが。しかしいずれも想像でしかありません。残っているのはその時集落の方々がとった行動と記憶

です。それが「鉄巖坊さまの祠」であり「昔語り」です。

安らかに眠ってくださいという気持ちとたぶん畏れも込めて祀られた「鉄巖坊さま」は祈りに応えてくれるありがたい存在になりました。そして、遠く窪川・松葉川から願掛けに来たという人々も昔はやはり往還を山越え歩いてやってきたのでしょう。

昔語りとはいえ、語り手の徳弘さんご自身のご利益を体験している、ある意味リアルタイムの話でもあります。

てんぐカーブの「関札」に込められているもの

「道切り行事」、「関札」は基本的には素朴な「祈り」なのですが、一方で「内ではないもの」を異質なものとして排除することにつながることもあります。歴史的に全国的に見ると、そうした暗い面が強く出てしまった事象も少なくないのだそうです。ムラが閉鎖的だというのはよく言われる話です。

そういうこともあったのかもしれない、しかし私は『はこばの四季』の中で移住者の西本五十六さんが語るあるエピソードを思い出します。

実は、西本さんが大正中津川に定住を決心した当時、新居を構える予定の場所は「関札」の外にありました。距離的には集落の中にあるのと変わらない、しかし「関札」を基準にするとそこはなんと結界の外になります。さて、それでどうなったか？

集落の中で話し合いが重ねられた結果、「関札」の場所が移され、新居は里内に入ることになりました。西本さんはこのエピソードを「これってちょっといい話でしょう」と語ります。ちょっとどころじゃない、これがとてつもなく深い話なのを西本さんもお承知でそうおっしゃっています。

この粹なエピソードを聞いたとき私はすごく感動しました。昔から続いてきた風習—それも信仰にもとづいた—を変えることは集落の方々にはかなり抵抗があったことでしょう。目に見える「関札」と同時に心の中にも「関札」があります。慎重にかつ決断をもって動かされた「ムラ境」。それは「寛容」と呼んでもいいものだと思います。

それ以来、私は中津川集落に来るたびに、かつての場所から少し移動した関札の姿を探します。大正中津川の入り口てんぐカーブの「関札」には「祈り」とともに「寛容」が込められているのです。

【註】

- ¹⁾ 福田アジオ 1984 「民俗の母体としてのムラ」『日本民俗文化体系 第八巻 村と村人—共同体の生活と儀礼—』p 44。
- ²⁾ 山本大編 1983 『日本歴史地名体系 第 40 巻 高知県の地名』p3 には、「現実の境界と社会的な境界（ムラ人の心意的な境界）とは必ずしも一致しない」とある。
- ³⁾ 室戸市吉良川町、南国市久礼田、土佐市岩戸、安芸郡奈半利町樋ノ口、香美郡土佐山田町（現香美市土佐山田町）大法寺、香美郡赤岡町（現香南市赤岡町）の本町横町、吾川郡吾北村上八川（現いの町上八川上分）本郷、高岡郡佐川町室原、高岡郡大野見村（現中土佐町大野見）、幡多郡大月町春遠、幡多郡十和村（現高岡郡四万十町）井崎、幡多郡十和村（現高岡郡四万十町）小野・願成寺、幡多郡大正町大奈路（現高岡郡四万十町大正大奈路）。
- ⁴⁾ 室戸市羽根町北生、土佐市出間、高岡郡東津野村（現津野町）宮谷。
- ⁵⁾ 昭和・戸口の組祈禱、口大道の春祭り、戸川の参り初め、小野の春祭り、奥大道の春祭り、久保川の村祈禱、河内の村祈禱、小野の十六善神祭、井崎の祈禱初め（神仏合祭）、地吉の村祈禱、古城の春祭り、浦越の春祭り、広瀬の若祭り、昭和・轟の春祭り。
- ⁶⁾ 昭和・戸口の組祈禱、口大道の春祭り、戸川の参り初め、小野の春祭り、奥大道の春祭り、久保川の村祈禱、河内の村祈禱、小野の十六善神祭、井崎の祈禱初め（神仏合祭）、地吉の村祈禱、古城の春祭り、浦越の春祭り、広瀬の若祭り、昭和・轟の春祭り。
- ⁷⁾ 徳弘さんの書き記されている昔語りは「鉄巖坊様の由来」のほかに「おひそ様の伝説」、「山犬の話」、「狸付きの話」、「福德様の由来」、「伊予の勘助の恨み」などがある。
- ⁸⁾ 『はこばの四季』には「鉄眼坊」となっており、訂正が必要。

【参考文献・資料】

高知県編 1978 『高知県史 民俗編』

高知県祭り・行事調査委員会 2006 『高知県の祭り・行事—高知県の祭り・行事調査報告書』高知県教育委員会
竹内莊市 2005 『十和千祭』飛鳥出版室

坪井洋文 1984 「序章ムラの論理」『日本民俗文化体系第 8 巻 村と村人—共同体の生活と儀礼—』小学館

徳弘誠男 2014 『中津川民話』（作成資料）

萩原秀三郎 1988 『目で見る民俗神第 3 巻 境と辻の神』東京美術

山崎眞弓 2014 『はこばの四季』南の風社

柳田国男 1910 『豊業経済と村是 時代ト農政』娶隋堂（「定本柳田国男集」第一六巻、筑摩書房、1962 年所収）

山本大編 1983 『日本歴史地名体系第 40 巻・高知県の地名』平凡社